

仙台市における切り花消費の背景を探る 切り花消費の地域性

著者	高野 岳彦
雑誌名	東北学院大学東北文化研究所紀要
巻	41
ページ	86-70
発行年	2009-12-25
URL	http://id.nii.ac.jp/1204/00023468/

仙台市における切り花消費の背景を探る

——切り花消費の地域性——

高 野 岳 彦

I. はじめに

「家計調査」によれば、仙台市における切り花の1世帯あたり年間支出額は、例年、全国47都道府県庁所在都市中の上位を維持し続けており、2004年には長年1位の鹿児島市を抜いて全国一にもなった。家計調査が対象にする一般家庭^{*1}における購入切り花の用途としては、日常生活での室内装飾用、仏前・墓前へのお供え用がすぐに想起される。また「支店経済」や「学都」としての仙台の特性から、年度替わり期のお祝いや送別会用の花束の需要も連想される。さらには、仙台は生け花が盛んであることが一因なのではないかという情報を寄せてくれた同僚もあった。

花卉消費には所得水準のような経済的要因のほか、生活習慣という民俗学的な要因も関連しているらしいことを想定しつつ、仙台の花消費に関する論文や記事の検索を可能な限り行ってみたが、ついには1件も発見できなかった^{*2}。

仙台の切り花支出額を全国トップに押し上げ

ている要因は何か。これを明らかにするためには、切り花の購買動向調査を仙台のほか比較対象となるべき他都市でも実施して比べてみればよいかもしれないが、それでも現況の一端が知れるに留まり、急増した1980・90年代の様相は分からない。本論では、ひとまず関連統計の精査と花卉業界関係者への聞き取りから知り得た仙台の切り花消費の背景について報告したい。

II. 家計調査からみた切り花消費と仙台

「家計調査」は、総務省が所管して毎年行われている抽出調査で、抽出世帯は1年にわたって所定の家計簿を付けるという協力が求められる。抽出は選挙人名簿に基づく地域類型ごとの一定比率抽出で、仙台市は「都道府県庁所在都市」の類型で毎年調査されている。調査世帯は6ヶ月ごとに半数が入れかわる。仙台市内での抽出方法は統計区ごとのランダム抽出で、2005年調査では108世帯（うち単身世帯8）が選ばれている^{*3}。品目別の支出金額は675品目別^{*4}に集計されていて、その1つに「切り花」が含

表1 1世帯あたり切り花年間購入額の上位10市の推移

「家計調査報告」各年版により作成

	1980	1985	1990	1995	2000	2005	5年次平均	2001～05平均
1	鹿児島 14,325	長崎 18,134	鹿児島 16,731	鹿児島 24,817	鹿児島 20,368	鹿児島 15,766	鹿児島 18,122	鹿児島 16,981
2	和歌山 10,564	鹿児島 16,722	長崎 16,142	仙台 21,063	福島 19,109	和歌山 15,633	仙台 15,759	仙台 15,511
3	仙台 10,439	仙台 14,342	和歌山 15,199	金沢 17,528	仙台 18,679	仙台 15,544	和歌山 14,215	福島 15,308
4	松江 10,191	松江 13,034	仙台 14,486	鳥取 17,501	和歌山 16,506	高松 15,261	福島 13,781	鳥取 15,138
5	京都 9,098	京都 12,358	大津 14,479	和歌山 16,580	高松 15,803	福島 15,161	松江 12,671	高松 14,786
6	大阪 8,933	大阪 11,927	都区部 14,362	福島 15,788	松江 15,503	鳥取 13,836	鳥取 12,624	和歌山 14,712
7	福島 8,877	盛岡 11,161	福島 14,219	大阪 14,902	山形 15,358	岐阜 13,632	高松 12,614	山形 13,209
8	佐賀 8,782	和歌山 10,810	大阪 14,078	都区部 14,709	金沢 14,661	金沢 12,639	金沢 12,544	松江 12,676
9	金沢 8,766	青森 10,638	鳥取 14,008	大津 14,644	盛岡 14,465	盛岡 12,475	長崎 12,424	富山 12,559
10	大津 7,844	岐阜 9,997	山形 13,954	水戸 14,439	青森 13,993	大津 12,423	大阪 12,081	青森 12,483

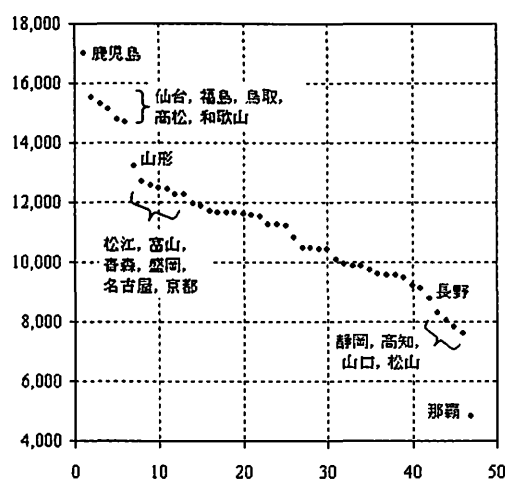


図1 切り花購入額の順位曲線
(2001～05の平均額：円)

まれている。

調査対象世帯は統計学的な抽出手続きによってのもの、母集団である総世帯数に比べればごく少数であり、また必需品とはいえない品目への支出額は世帯ごとのバラつきが大きいため、各都市の購入額は毎年変動し、順位もまた変動する。表1は、1980年から5年おきに2005年までの切り花年間購入額の上位10市について示したものである。毎年変動する中で鹿児島が突出した1位、仙台は2・3位を維持し続けており、お隣の福島市も上位にあることが分かる^{*5}。

次に、切り花の購入には気候や大都市との距離といった地域性とはどんな関連があるのだろうか。表1を見る限りでは、上位には北日本も南日本の都市も、また大阪のような大都市も含まれ、説明できそうな地域性があるようにはみえない。この点を確かめるため、全47市の順位分布グラフを作成してみた(図1)。南国の鹿児島と那覇が突出した1位と最下位にあり、上位・下位の府県ともに東西にバラついて、地域性を見出すのは難しい。分布図(図2)にしてみると、支出の多い都市はバラついていて、明らかな地域性は見出し難い。

他方、切り花購入額自体は、いわゆるバブル経済崩壊後の1993年をピークに全般に減少して

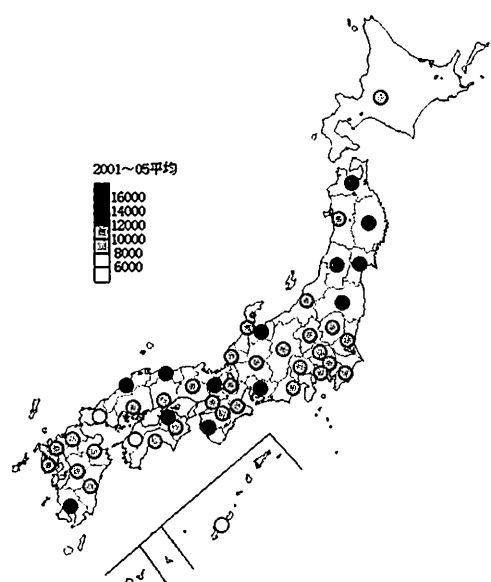


図2 1世帯あたり切り花支出額の分布
(都道府県庁所在地の2001～06年の平均値)
家計調査年報による

いる(表1)。これは、景気変動によって左右される瀟洒品としての切り花の商品特性を反映したものといえる。

Ⅲ. 花消費とその地域性の分析

1) 花き流通研究者による見解

花に関する研究には生産と流通に関するものは多いが(太田1978;長岡1998;両角2002)、消費について論じたものは少ない。少数の研究例のうち、榊山(1975)は、「花卉園芸の発展は文化のバロメーターともいわれ、生活水準の高い国ほど花卉の生産・消費は高い」と述べている。また矢口(1992)は、1980年代の動向として、1世帯あたりの花卉消費の伸びが所得の伸びを大きく上回ったこと、その理由として「気持ちに余裕ができ」たこと、ギフト用に花を購入することが増えたことを指摘し、仏事用から家庭用・業務用へのシフトを「花消費のトレンド」と述べている。さらに、均質な花を大量生産・集荷できる流通システムが整備されて量販店でのセルフ売りが登場し、消費者が花に

アクセスしやすくなったという小売形態の変化も指摘している。

また、90年代前半の動向を論じた辻（2001）は、稽古用は減少、業務用は停滞し、家庭内消費が増加する傾向にあること、切り花の所得弾力性は低下する傾向にあり、切り花消費が大衆化してきたこと、切り花の購買層は高齢世帯に多いことなどを1993～95年に関西地方で実施した消費者アンケートに基づいて明らかにしている。

2) 梶山（1975）による分析の検証

一方、花消費の「地域性」については、これら花卉流通研究の分野ではほとんど論及されていない。唯一、地理学出身の梶山（1975）が、1965～72年の家計調査のデータの整理によって、切り花支出額の地域性を論じている。その中で梶山は、「わが国でも……所得水準の高い、すなわち文化度の高い都市に花卉消費が集中している」とした上で、表2のデータを掲げて、1世帯あたり切り花支出額は京浜、中京、京阪神、北九州という大都市圏で全国平均を大きく上回り、北海道、東北、北陸、中国、四国、九州といった「地方」では全国平均以下の値となっていることを示している。

表2 1世帯あたり切り花支出額の地方別の推移

	1965	1968	1970	1972	変化率
北海道	918	1,258	1,379	2,117	130.6
東北	992	1,198	1,664	2,457	147.7
関東	1,437	1,604	2,127	2,577	79.3
北陸	1,182	1,515	1,805	2,169	83.5
東海	917	1,176	1,669	2,233	143.5
近畿	1,567	1,995	2,401	2,975	89.9
中国	804	1,116	1,535	1,986	147.0
四国	747	983	1,465	2,278	205.0
九州	991	1,253	1,616	2,240	126.0
京浜	1,620	1,767	2,303	2,692	66.2
中京	1,097	1,382	1,811	2,424	121.0
京阪神	1,703	2,068	2,476	2,982	75.1
北九州	1,233	1,257	1,732	2,397	94.4
全国	1,206	1,491	1,926	2,488	106.3

※家計調査年報による。「変化率」は1965～72年で、単位は%。
 ※梶山（1975）表5に習い作成。ただし同表の1972年の数値は家計調査年報の数値と異なっているので、変化率とともに修正してある。

必需品ではない花の消費が所得水準の高い大都市地域で多いという見方は確かに理解できるものであるが、他方これは冒頭で示した表1や図2が示す最近の傾向とは大きく異なる。そこで、改めて1965年以降の「地方」別の切り花支出額の推移を、前後2年を含めた5年間移動平均値のグラフにしてみた（図3）。すべての「地

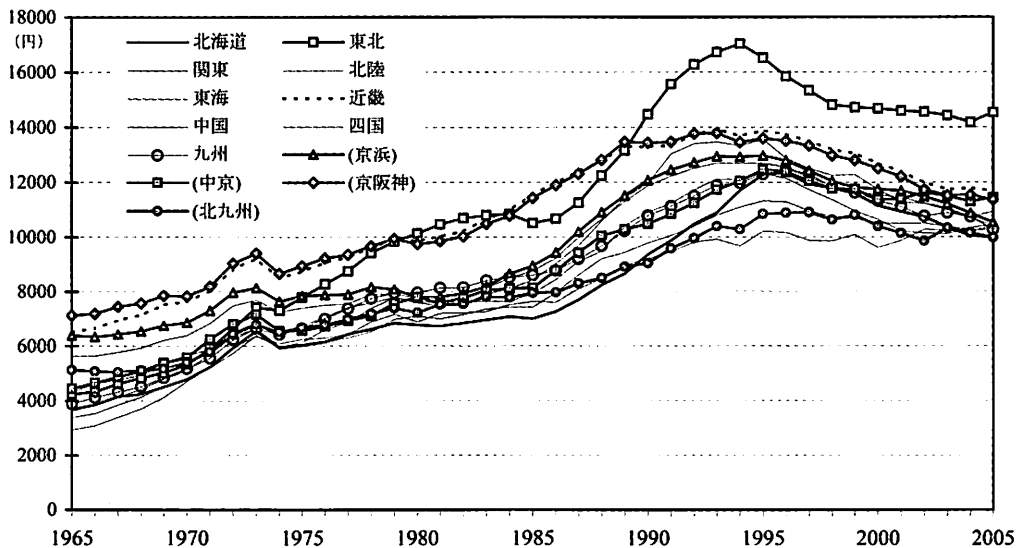


図3 1世帯あたり切り花支出額（1995年基準の消費者物価指数によるデフレート値）の地方別推移
 「家計調査報告」各年版、総務庁総計局 web の消費者物価指数により作成。

方」にマーカーを付すと見にくくなるので、大都市圏を灰色のマーカーを付し、「地方」の代表として東北と九州に白ぬきのマーカーを付して示した。

これをみると、大都市優位の傾向は1975年頃を境に大きく変化したことが分かる。すなわち、第一に1974年から京浜が停滞したのに対して、東北地方が急上昇に転じて京阪神を含む近畿地方と並ぶ全国の最上位を占めるようになった。第二に、85年頃からは各地方の急上昇で大都市との差は明らかに読み取れなくなった。第三に、87年からとりわけ東北地方が急上昇して他地域を大きく上回る状況となった。そして第四には、95年以降、支出額が全般に減少する中で東北地方は微減にとどまり、大都市と地方との差はさらに不明瞭になったことである。

1975年といえば、オイルショックによって高度経済成長が終焉した翌年であり、80年代は円高と大都市の地価高騰で東北をはじめとする地方農村に工場が進出した時代、そして90年代はバブル経済とその崩壊を経験した時代である。こうした時代背景と切り花支出額の地域性の変化とは、一定の対応がみられそうだ。特に70年

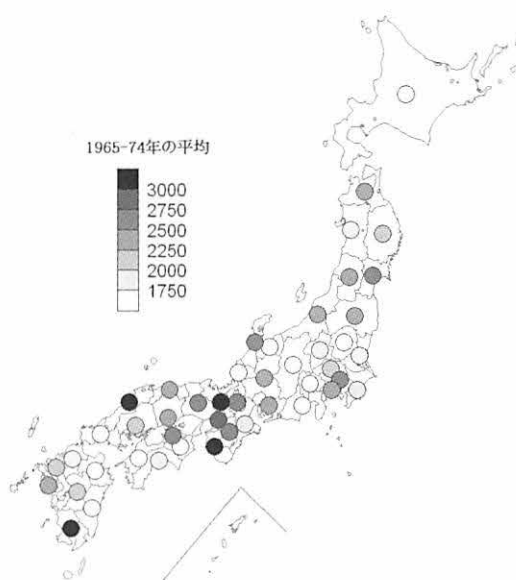


図4 1世帯あたり切り花支出額の分布
(都道府県庁所在地の1965～74年の平均値)
家計調査年報による

代後半と80年代末以降の東北地方の顕著な変化の背景には、この時期に進行した大都市圏からの工場移転による地域労働市場の充実と所得格

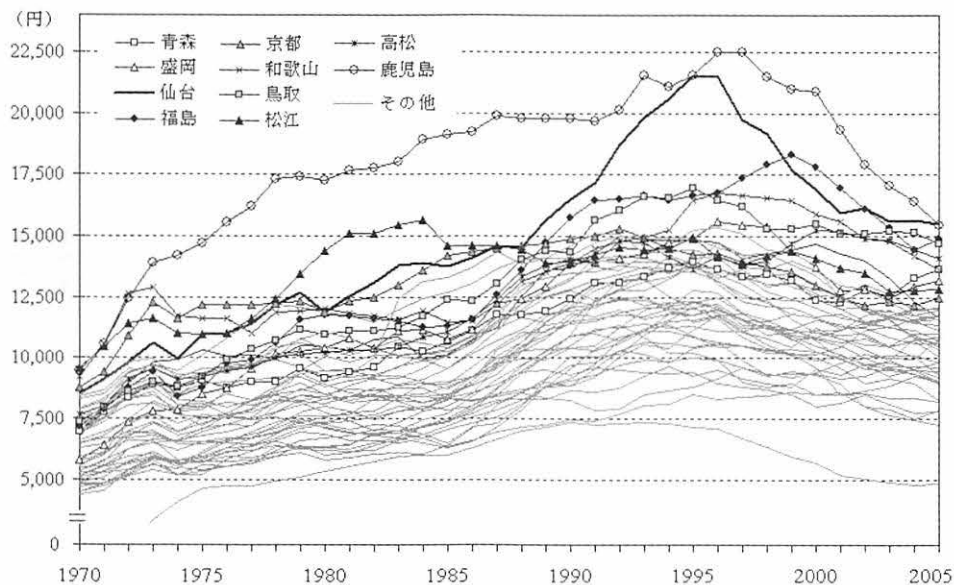


図5 1世帯あたり切り花支出額（1995年基準の消費者物価指数によるデフレート値）の都道府県庁所在地別推移
「家計調査報告」各年版、総務庁統計局webの消費者物価指数により算出。

差の縮小があったことが想起される（安東1984）。

3) 切り花消費の地域性—都道府県庁所在都市別の検討

切り花支出額はそもそも大都市圏と非大都市圏、あるいは東北や関東といった「地方」のスケールで一定の地域性を持つ現象なのであろうか。確かに1975年頃までは大都市圏に多いという傾向は認められたが、最近の表1や図1・2

をみていると、もっとローカルな消費性向にかかわっているのではないか。本項ではこの点を分析する。

試みに、1965～74年の都道府県庁所在都市の切り花支出額を分布図にすると図4のようになる。図は、この時期、「大都市圏」というよりは近畿地方に支出額の多い都市が集まっていたこと、また鹿児島、高松、松江、仙台など、近年でも支出額の多い都市が既に上位にあることが注目される。また、図2と比べると、「地方」

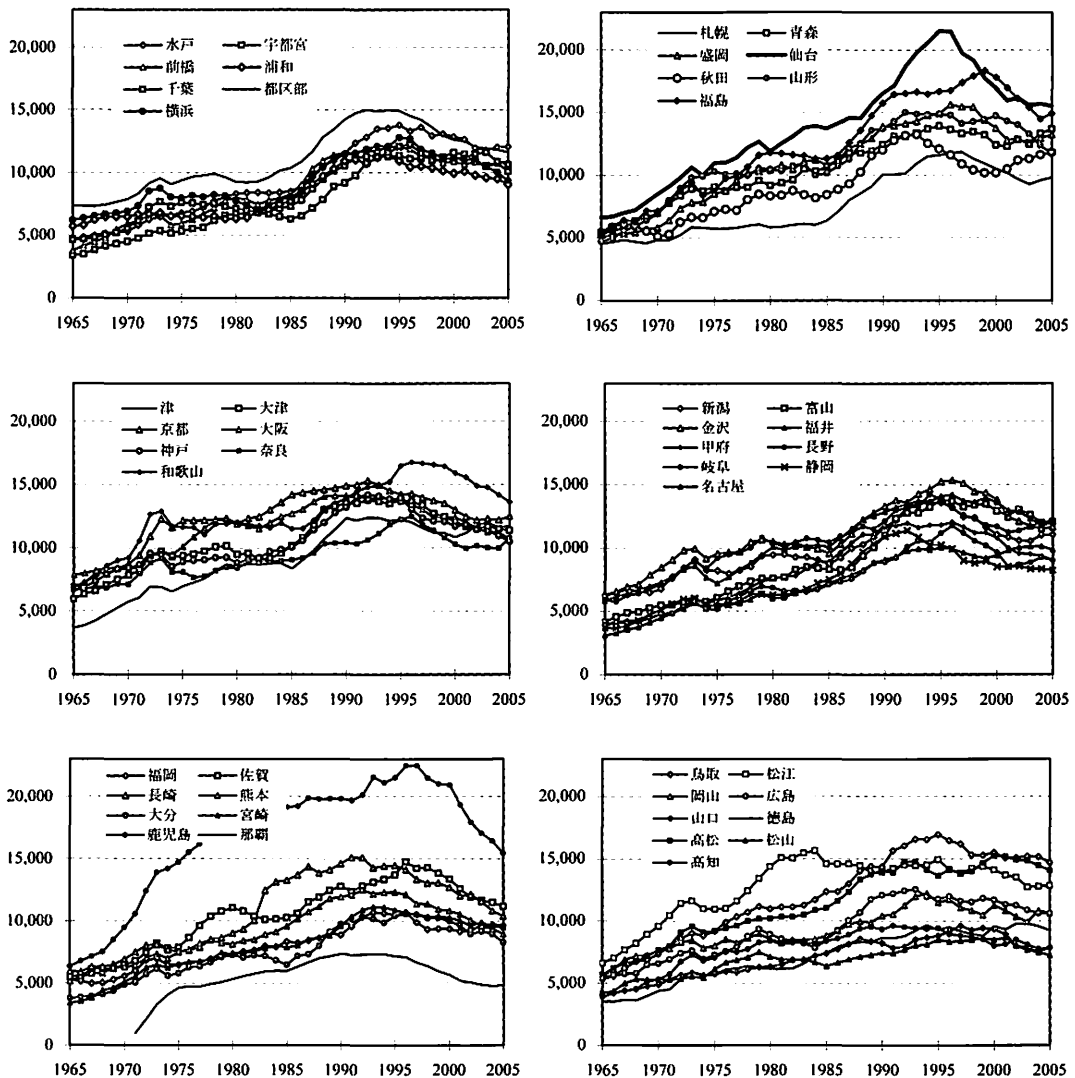


図6 1世帯あたり切り花支出額の推移（地方別） ※使用データは前図と同じ。

がまとまって連動するような変化があったようにはみえない。

図5は、都道府県庁所在市別の推移を5年間移動平均値のグラフで示したものである。マーカーは、2005年の値（03～07年の平均値）の上位10市にだけ付してある。これをみると、上位10市はいずれも従前から最上位にあった都市である。また「大都市」は京都だけである。中位・下位の都市にも従前からそれほど大きな変動はみられない。東北地方に着目すると、80年代末から仙台市が他を圧倒するような急上昇を示し、福島市は80年代と90年代の後半に急上昇して最上位の都市群に仲間入りするようになり、そして盛岡市と青森市は90年代末からの全国的な低迷期に堅実に推移して上位に位置するようになった。

図6はこれは8地方ごとに分けて示したものである。これを見ると、地方内での都市間差が小さくまとまって推移しているのは関東、近畿、中部で、差が大きいのは九州・沖縄と中国・四国である。とりわけ鹿児島島の突出が著しい。

東北地方では、90年頃までは比較的小さな差で推移していたが、その後は仙台の急伸、秋田の急減、福島急伸があって、2000年頃にかけて一時差が広がった。しかし2000年以降は仙台、福島、山形が急減し、逆に他から水を開けられていた秋田市が伸びて、6都市間の差は再び縮まる趨勢にある。

全体を通覧して注目されることとして、次の2点が指摘できる。第一に、各地方の大都市や中核都市が必ずしも上位にあるとはいえないということである。すなわち、東北・北海道の札幌、関東の横浜、近畿の大阪と神戸、中国・四国の広島、九州の福岡は、それぞれの地方の中で切り花支出額が多いとはいえない。第二に、各都市の順位、とりわけ上位都市と下位都市の順位には、それほど大きな変化がなく推移してきているということである*⁶。従前から切り花支出額が相対的に多かった都市は、その傾向を保ちながら今日に至っているといえる。

4) 小括

以上の諸統計が示す傾向をまとめると、1世

帯あたり切り花支出額は、高度経済成長期には確かに大都市圏のほうが地方に比べて多かったといえる。これはこの時期に顕著になった大都市と地方との間の経済格差のためと考えられる。そして高度経済成長後の80年代以降、関東や中京などの大都市よりも、東北をはじめとする「地方」での伸びが上回り、大都市・地方間の差は縮小した。

それに代わって目立ち始めたのは、従前から伝統的に切り花支出が多かった都市であった。とりわけ70年代には鹿児島、80年代には長崎や松江、80年代後半からは仙台や福島がそれぞれ急伸して全国の最上位を争うに至ったが、これらはいずれも従前から支出額が多い伝統的な切り花消費地であった。それらの都市が80年代以降、大都市圏での伸びを大きく上回る勢いで切り花消費を増加させた結果、統計の上でも顕著に認識されるに至った、というふうに解釈するのが妥当と考える。

また、冒頭で仙台市の特徴として指摘した「支店経済」や「学都」としての性格は、札幌、広島、福岡にも共通の性格といえるが、これらの3市の切り花支出額は多いとはいえず、こうした都市の機能特性のみが切り花支出額を規定する要因とはいえないといえることができる。

つまり、切り花の支出性向は、大都市・地方といった、いわゆる生活様式の都市化や所得水準の程度によるものとは別に、伝統的に支出性向の高い都市や少ない都市が従前から存在していたのであること、それは例えば、東北日本と西南日本とか、関東、東海、九州といった「地方」程度のまとまりよりも局地的で、少なくとも県レベル以下の地域的な消費の性向によるものと解釈される。

こうした中で、仙台市に改めて注目してその切り花支出額の推移の特徴をまとめると、東北地方の中で従前から切り花支出の多い都市であったこと、第二に70年頃以降に東北の他都市とともに急増に転じて全国での地位を上昇させたこと、とりわけ90年代に急伸して全国一の鹿児島市に急迫したこと、そしてバブル後の95年からは全国的趨勢と並行して減少に転じながら

も2000年代には鹿児島市や福島市と並ぶ全国一の切り花支出都市の地位を維持している、ということになる。

IV. 花卉流通業界の見方とその検証

1. 花卉流通業界の見方

このような仙台の切り花消費の背景についての情報を得るため、仙台の花の流通・消費に関連するとみられる業界や団体関係者に対してヒアリング調査を行った。訪問先としたのは、切り花の購買動向について最も経験知を持っていると考えられる仙台中央卸売市場花卉市場内の仲卸組合と小売商組合、および市内中心部に店舗を持つ老舗生花店の3者である。

質問内容は、①仙台市は他地域よりも切り花消費が多いと実感しているかどうか、②それは

仙台における切り花の利用にかかわるどんな特徴や伝統を反映していると考えているか、③それは市場構造（取り引きされる花の品目構成や単価など）のどんな点に反映していると考えているか、④90年代に仙台での切り花支出額が全国で飛びぬけて急増した背景として考えられること、そして⑤他地域の情報という5点である。それらの証言内容をまとめると表3の通りであった。

これによると、仙台が切り花消費が多い地域であることは3者とも実感していることがまず確認される。そして、仙台市の切り花支出額の多さの主な要因としては、「墓前供花の慣行」が3者共通に語られた。次いで「生け花」が盛んであるらしいこと、さらには3月の最需要期と関連する学生・転勤族の都市としての性格も指摘された。そしてこれらは、「生花店の多さ」

表3 仙台市の花卉流通業者へのヒアリング結果

(06年11月、07年1月、09年3月)

	花卉仲卸組合（事務局長）	花卉小売商組合（企画室長）	老舗花卉店（店主）
仙台市は他地域よりも切り花消費が多いと実感しているか	感じている。	感じている。	実感している。 1回あたりの購入額が多い。
それは仙台における切り花の利用にかかわるどんな特徴や伝統を反映していると考えているか	<ul style="list-style-type: none"> ・仙台では城下町の伝統もあり、伊達時代から生け花が盛んだった。野ばら、野あざみ、すすきなど野草を利用した。京都や金沢も生け花盛ん。 ・先祖を大切にする習慣もあり、毎月1・15日は墓参りの習慣。筒に入れる供花も多く、筒自体の本数も多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・仙台では、墓参りの際、花立てを各自持っていく習慣。 ・仙台は人口あたり生花店も多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・仙台北下では寺がまとまって配置されたため、寺町（25寺が集まる）では、墓への供花は、自分の墓の分だけでなく近所の墓にも供える習慣があった。1人で数件分の花を購入する人も。 ・その後、都市化や市街地開発とともに、寺町の寺が北山や葛岡に移転する際、そうした習慣も広がったのでは。
それは市場構造のどんな点（花の品目構成、単価など）に反映していると考えているか		<ul style="list-style-type: none"> ・花の価格も高めであることも、購入額の多さに影響しているのでは？ ・バブル後、全国的には減る中で、仙台市場の買参人は480（県内800）で横ばい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・特に多いのは3月の卒業式、離任式、退職シーズン。3月の5・10日は、特に大量需要。 ・春彼岸…キク、ストック、チューリップ、スイートピー ・お盆・秋彼岸…キク、ユリ、スターチス、トルコギキョウ、リンドウ
90年代、仙台での切り花支出額が急増した背景として考えられることは？	<ul style="list-style-type: none"> ・量販店が大量に扱うようになって消費が増えたからでは？ 	<ul style="list-style-type: none"> ・1988年、中央卸売市場花卉部の開設で全国から花が集まるようになり、買参人も増えた。 ・この頃から、削り花が減って生花が増えたように思う。 	
他地域の情報	<ul style="list-style-type: none"> ・福島浜通り、三陸沿岸も多い。 ・南部藩領では少ない。 ・郡部では仏壇が大きく、丈が70cmのキクを飾る（関西は30cm） ・鹿児島が多いのも、藩政期からの墓前花の伝統。しかも曇くて日持ちせず、3日に1度取り替える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・東北地方は全国的にも仏花は多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・福島が多いのは、仙台生花糊の社長の出身地で、花小売が盛んであることが関係するのでは？

や市場構造（上場花卉の種類、高単価、月変動）に反映しているらしい、という指摘もあった。

また、90年代の激増の要因としては、花卉市場の整備、量販店の増加という流通の革新と、「削り花」の減少の可能性があわせて指摘されたのは興味深い。

そこで以下では、これらの点について裏付けになると考えられる関連団体へのヒアリングと統計データの分析によって、可能な限りそれらの当否ないしは「確からしさ」について検討してみたい。

2. 墓前供花の慣行

仙台は伝統的に墓前供花の量が多い地域であるということは、ヒアリングした3者のいずれもから指摘されたことから、最有力の要因といえる。特に、城下町時代以来の寺町「新寺小路」の裏通りに立地する老舗生花店では、寺町がまとまって配置された城下町の構造によって特有の供花慣行が成立したという興味深い指摘があった。実は、このことは『仙台中央卸売市場30周年記念誌』に記載があり^{*7}証言もこれに基づくとみられる。また、仲卸組合で指摘された鹿兒島市における熱心な墓前供花の伝統については、同様のことを述べた短文を見出した^{*8}。

いずれにしても、墓前供花の慣行が切り花支出額に影響を与える重要な要因となり得るという見方は、説得性を持つといえる。

冒頭で述べたとおり、仙台の墓前供花慣行に関する既存文献は見出すことはできなかったので、墓地の開設・管理者である仏教寺院の団体「宮城県仏教会」にヒアリングを行ったところ、ここでも「仙台は墓前供花の量が多いところで、花を入れる筒に供えた人の名前が書いてあるのがその証拠」との証言を得た^{*9}。

ところで、仙台での切り花消費の多さがこうした墓前供花の慣行によるものだとすると、それは供花の代表であるキクの消費量とその月変動に表れているのであろうか。この点は、後節の上場データの分析に委ねることにする。

3. 生け花との関連

仙台で生け花が盛んといえるのかどうか、またその切り花消費との関連性について宮城県華道連盟の事務局長を務める心月寺（利府町）住職にヒアリングを行い、以下の証言を得た：

- ・仙台の華道は、人口比では盛んなほうとはいえるが、それが切り花消費の費量を左右するほどとは思われない。切り花の消費への効果は仏事用が大きいと思う。また、生け花を習っている人が仏前・墓前の供花も多いということはない。
- ・流派による違いは、使用する花の種類に偏りは出るが、花の使用量に差が出ることはない。
- ・以前、華道人口は県内で5万人いたが、近年では職場や高校・大学の華道部の廃部が相次ぎ、現在の華道人口は7,000～8,000人程度であろう。

また、前記の老舗生花店での聞き取りの際にも以下のような華道への言及があった：

- ・華道教室と取り引きがあるのは老舗の生花店で、当店では約30件の華道教室を顧客にしている。
- ・華道教室は10年ぐらい前から生徒が急減して、5年後には消滅の危機とのうわさもある。
- ・生け花教室は、専用教室を持つもの以外に、私宅で行われる場合が多い。事業所統計で把握可能なのは前者だけで、統計はあまり参考にならない。

以上をふまえると、切り花消費が多いことと華道が盛んであることとの間には有意な関連があるとは思われないといえる。

4. 生花店の数

生花店に関する統計としては、商業統計の「花・植木」小売事業所数が業種分類上最も近い。植木産地がある場合は過大に評価されることになるが、他に利用できる統計はないため、2002年の同統計を用いて仙台市の地位を確認してみたい。

表4は、人口10万人以上（2000年）の全国228都市の「花・植木」小売事業所数と販売額、およびそれらの人口あたり相対値について、上

表4 「花・植木」小売事業所に関する統計値

花・植木小売事業所数			花・植木小売販売額 (百万円)			人口1万人あたり 花・植木小売事業所数			人口1万人あたり 花・植木小売販売額(円)		
順位	市区町村	値	順位	市区町村	値	順位	市区町村	値	順位	市区町村	値
1	東京区部	2,924	1	東京区部	92,639	1	松江市	6.7	1	ひたちなか	15,111
2	大阪市	929	2	大阪市	24,721	2	石巻市	6.4	2	一宮市	13,638
3	横浜市	905	3	横浜市	24,057	3	今治市	5.7	3	府中市	13,168
4	名古屋市	769	4	名古屋市	20,150	4	伊勢市	5.4	4	浦安市	13,099
5	京都市	502	5	京都市	14,323	5	鹿児島市	5.3	5	津市	12,999
6	札幌市	489	6	札幌市	13,037	6	別府市	5.2	6	松本市	12,571
7	福岡市	469	7	仙台市	9,230	7	都城市	5.2	7	都城市	12,500
8	北九州市	434	8	福岡市	9,119	8	鳥取市	5.1	8	桑名市	12,226
9	仙台市	371	9	神戸市	8,928	9	佐賀市	5.1	9	西尾市	12,182
10	神戸市	366	10	北九州市	8,268	10	松阪市	4.9	10	土浦市	11,945
9	仙台市	371	7	仙台市	9,230	60	仙台市	3.7	37	仙台市	9,156
46	福島市	126	60	福島市	2,348	37	福島市	4.3	61	福島市	8,065
12	鹿児島市	294	15	鹿児島市	5,424	5	鹿児島市	5.3	23	鹿児島市	9,824

※「商業統計」(2002)、および「国政調査」(2000)の人口により算出。

位10位までと、仙台市、および切り花支出額全国一を争う福島・鹿児島市の両市を比較のためあわせて示したものである。これによると、小売事業所数と販売額では大都市が上位を占めるのは必然として、仙台市は人口順位(13位)に比べて上位にあることから、大都市の中では「花・植木」小売業が相対的に集積しているといえる。そして、仙台市内に植木の産地はないことを考えれば、これは花の小売業の集積を示すものと理解される。

一方、人口あたりの相対値では、多様な機能の集積する大都市は下位に退き、代わって、事業所数では松江、鳥取、鹿児島といった切り花支出額の多い西日本の都市がここでも最上位を占める。また販売額の上位には植木の主産地が含まれる。東北の主な都市は概ね20～130位と、多いほうである。仙台は事業所数で60位、販売額で37位と、最上位とはいえないがかなり上位のほうであるといえる。なお、事業所数で石巻市が2位にランクしているが、これは「三陸沿岸で切り花消費が多い」という仲卸組合の経験知(表3)と合致する^{★10}。

V. 切り花品種からみた市場構造の分析

1. 切り花品目と市場特性

老舗生花店での証言(表3)にあるように、墓前供花の種類には定番品目がある。すなわち、いずれの時期にも使用されるキクのほか、春彼岸ではストック、チューリップ、スイートピーなど、お盆と秋彼岸ではユリ、スターチス、トルコギキョウ、リンドウなどである。そしてこれらは墓参シーズンの月に急増するという傾向もあるという。

また、切り花の種類とその市場特性について、花卉流通の専門家は次のように述べている(辻、1997?):

「従来から大量に流通している輪ギク、カーネーション、宿根カスミソウ、フリージア、ストック、テッポウユリ、アイリス等…(中略)…の卸売数量は減少ないし横ばい傾向にある。これら切り花の用途は冠婚葬祭等の業務用が中心であったり、家庭での消費が特定の需要期(彼岸、盆、正月、母の日等)に集中している。一方、スターチス、スプレーギク、スイートピー、トルコギキョウ、チューリップ、ガーベラ等の少量取扱品目の増加率は大きい。そして(中略)これら品目の用途は業務用、贈答用、家庭内消費等多様である。卸売市場の取扱品目

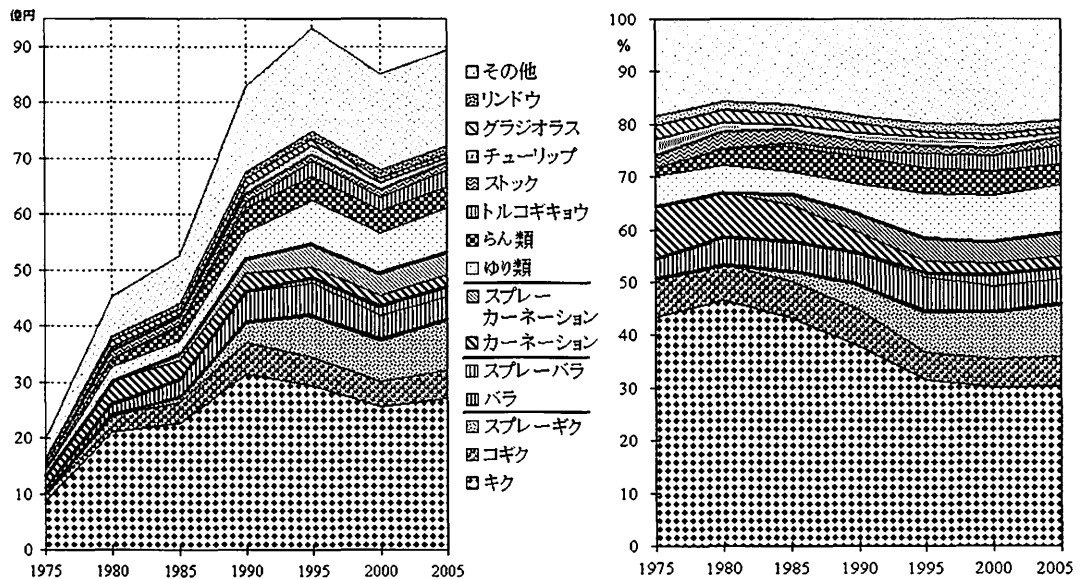


図7 仙台市中央卸売市場の切り花の品目別取扱額（左）と構成比（右）の推移

※「市場年報」各年版により作成。

構成が変化しているのは、切り花需要が用途別に変化しているからである。」

つまり、市場取引引きされる切り花には、従来から大量に取引されている冠婚葬祭用や業務用のキクやカーネーションなどのほか、贈答用や家庭内消費用を含む多様な用途の少量品目があり、後者の増加率が大きいということである。

これらのことと、仙台における切り花支出額の多さの要因として墓前供花の量の多さがあるらしいことを考えあわせると、仙台の花卉市場への上場品目とその入荷量の月変化を分析することで、仙台における切り花需要の特性が明らかになるのではないかと期待した。この期待のもとに、ここでは仙台における切り花消費の特性を卸売市場で扱われる切り花品種の分析から整理してみたい。

2. 切り花の品目構成の検討

図7は、仙台市中央卸売市場における切り花の品目別取扱額と構成比率の推移を示したものである^{*11}。左図で1995年までの急増状況とその後の停滞を再確認しつつ、品目構成に表れた市場構造の変化について検討する。

切り花の主要品目といえば、「御三家」とされるキク、バラ、カーネーションがある。これらは仙台市場でも、コギクやスプレー品種をあわせれば、切り花取扱額の6割を占める。中でも、コギク、スプレーギクをあわせた「キク類」は、市場の半分を占める突出したシェアを維持してきた。筆者は、80・90年代の切り花支出の急増期に、仙台の都市発展に対応した大変化がみられるのではないかと期待したが、図7にみられる通り、品目構成に顕著な変化が生じたわ

表5 切り花の品目構成の比較（2005）

	秋田	仙台	東京
キ ク	44.9	45.9	26.0
カーネーション	8.0	6.8	7.4
バ ラ	7.0	6.8	13.1
ユ リ	8.4	8.9	9.2
スターチス	2.2	2.4	2.1
トルコギキョウ	2.9	3.4	5.6
ラン類	5.4	4.1	4.8
その他の切り花	21.4	21.7	31.8
合 計	100.0	100.0	100.0

各市場の年報による。品目は東京市場の「中分類」。

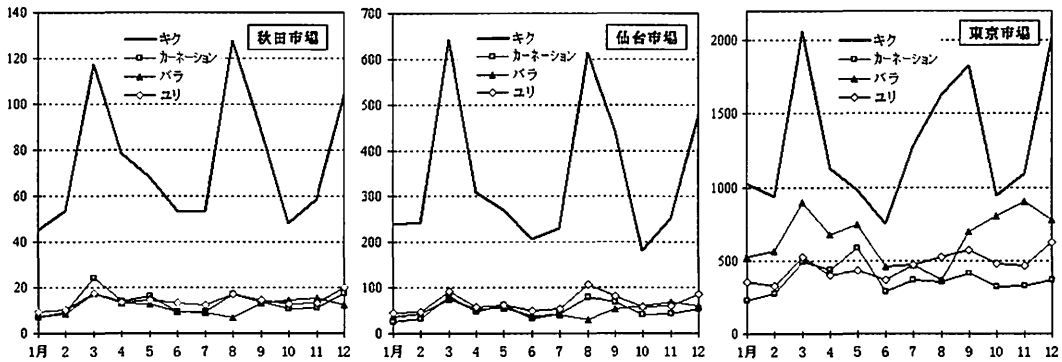


図8 仙台・秋田・東京市場における切り花主要4品目の月別取扱額（2005）

※各中央卸売市場の「市場年報」により作成。

けではなく、従前の品種構成が概ね保たれつつ量的に拡大したものであることが分かった。

しかしより詳しくみると、この間の変化は、1975～85年の取扱額の急拡大初期、1985～95年の急拡大後期、そして95年以降の停滞期の3つの時期に分けて把握されるようだ。まず急拡大初期には、キク類がシェアを過半まで伸ばして、急増する切り花消費を主導した。キク類の主用途が仏花であることを考えあわせると、伝統的にみられた墓参慣行がこの時期に切り花購入の急増に結びついたと理解できるかもしれない。この時期にはまた価格の高いラン類やバラ類もシェアを伸ばした。

急拡大後期には、キクやカーネーションにスプレー品種が登場してシェアを増やしたものの、全体として「御三家」のシェアは停滞・縮小傾向となった。代わって、「その他」の増加に表れた「多様化」が進行した時期といえる。また、1990年頃からはユリ類が急増して、バラ、カーネーションを凌ぐ主要品目になったのも大きな変化であった。

市場規模が縮小傾向に転じた95年以降は、この様相に大きな変化がない中で、高価格のラン類やバラがシェア縮小傾向なのに対して、キク類はスプレー品種の人気もあって比率を再び拡大させてきている。

一方、仙台市場の特徴を明らかにするために、他市場との比較も必要と考え、試みに大消

費地の東京市場^{*12}と、東北地方の県庁所在市の中で1世帯あたり切り花支出額が最少である秋田市場とを比較してみたのが表5である。これによると、東京市場と秋田・仙台両市場の間には、キク類と「その他切り花」の割合に大きな違いがある。

ここで、キクが少なく「その他切り花」が多いのが需要が多様化した大都市的市場、逆にキクが多いのが伝統的市場ということができるとすると、東京市場にはまさに大都市的性格が表れ、秋田・仙台両市場は伝統的な性格が表れていると理解できるのではないだろうか。こうした解釈が妥当なものだとすると、仙台市場には東京と秋田の中間的な品目構成の特徴が表れてもよいと考えられる。しかし、キク類の割合が秋田市場をも上回っていることは、その伝統的な墓前供花の慣行が反映しているため、と解釈できるかもしれない。

一方、図8は、主要4品目の取扱額の月別変化を示したものである。仏花の代表であるキク類には3月と8月の墓参月にピークが表れるが^{*13}、このピークとその他の月との差が大きいほど、供花用のキクの消費が多いとみることができる。図に表れたとおり、秋田・仙台・東京の3市場でキク消費のピークが最も顕著なのは仙台市場である。このことは、仙台における供花量が多いという墓参慣行の1つの裏付けといえる。

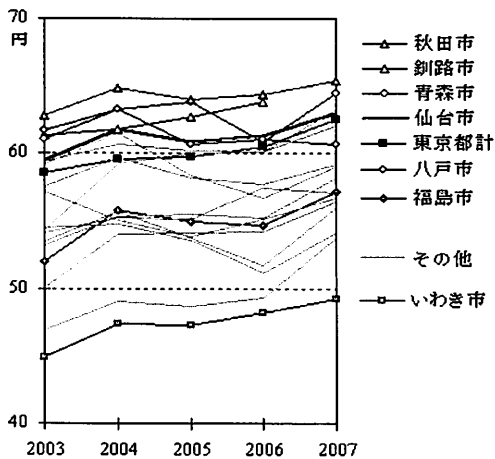


図9 全国の中央卸売市場の切り花単価の比較
農林水産省「花卉卸売市場調査」により作成。
同調査の対象は花卉部のある中央卸売市場

3. 単価

花卉小売商組合でのヒアリングの際、「仙台市場の花の価格は高めで、それは購買額の多さを反映しているのでは」という趣旨の証言(表3)があった。次にこの点を検証する。

図9は、各地の中央卸売市場における切り花の単価の推移を示したものである。判読しやすいように、仙台市場を太線で、東北地方と東京都下の市場にマーカーを付し、他は細線だけで描いてある。これをみると、仙台市場の切り花の単価は確かに全国的に高く、上記の証言を裏付けている。

ただ、切り花支出額で全国トップを争う福島市場では単価は低いほうであること、切り花支出額の少ない秋田市場の単価が全国最高であることを考えると、「購買量が多いから高価格」という単純な理解は成り立たないことも分かる。釧路、青森、八戸といった北日本での高価格は、むしろ供給量の少なさを反映しているとも理解される。

つまりは、仙台市場の切り花単価の高さは、旺盛な購買活動の状況証拠の1つであり、切り花支出額の多さにも反映し得る仙台市場の特徴の1つといえる。しかし、説明に十分な条件であるとはもちろんいえない。

VI. 90年代の仙台における花き流通環境の変化

ところで、80年代後半から90年代にかけて、より具体的には1989～97年の間に仙台の切り花消費が急増した(図5)背景としては、卸売市場の拡充や郊外立地の大型量販店やホームセンターの登場という流通革新を指摘する関係者の証言があった(表3)。本章では、最後にこの点を整理しておきたい。

1) 花卉市場の整備

花卉市場の整備の流れについては、『仙台市中央卸売市場30周年記念誌』(1991)に記されており、仙台における花業界の動きを知る上で興味深い。仙台市中央卸売市場は、1960年12月、宮城野貨物駅の隣接地に開設されたが、仙台の発展とともに急増する生鮮品を裁ききれなくなり、1972年4月に現在地への移転計画が決定され、1973年11月に落成・開場した。この間、卸売業者や仲買業者の再編が行われた。

注目すべきは、1973年4月の卸売市場法の一部改正で生鮮食料品に加えて花卉が取り扱えるようになると同時に花卉部が追加されたことである。水産・青果・花卉の3部門をそろえた中央卸売市場は全国初であった。花卉部の開設は、法改正に先立って花卉業界から積極的な意見が出されていたということであり、その背景として、生花取り引きが増加した大正期以降の活発な仙台の花き流通業界の動きが述べられている^{*14}。花取り引きの合理化・近代化が業者の側から希望されたものであったこと自体、仙台における旺盛な花需要の伝統を物語る。

1980年代になると花卉部の取り扱い量はさらに伸びて開設時から倍増したため狭隘化が目立ったこと、また花卉棟と鉢物棟が分離されていたことから花卉部の移転が検討され、1984年、現在地への分離移転が決まり、1988年1月に落成・業務開始となった。この移転の効果については、表3に略記した花卉小売商組合での証言があるが、その内容を具体的に紹介すると以下の通りである：

・1988年は、仙台市中央卸売場の花卉部が苦竹

に移転して市場施設が大きく綺麗になり、名実ともに東北の花の流通拠点になった年である。それ以前は、青果や水産の市場の一角にあり、花きという華やかな感じにはほど遠い状況だった。

- ・市場が移転したことで、東北一円の花屋さんからの注文も多く、市場価格も高止まりの傾向もあった。高い市場価格は全国の花が集まる大きな要因で、それを需要する経済状況があったといえる。
- ・市場は明るく、多くの女性の買い出し人が市場に来るようになった。
- ・バブル期にかかって業務用の需要も急激に伸びていて、新規参入の花屋さんも増えたようだ。
- ・ちょうど花博（大阪）の開催が2年後に計画されて、花への関心が高まっていた時期でもあり、当時の生産者は、「毎日がお祭りのようだ」と言っていたことが思い出される。

まさに花市場の統合・移転は、90年代の仙台市場における花卉取扱量の急増を演出する重要な出来事であったといえる。

花部門をもつ中央卸売市場は現在でも18都市・22市場だけであり、仙台市場の切り花取扱額94億円は、東京都中央卸売市場の693億円に次ぐ全国第2位である（2006年）。

2) 郊外型量販店、ホームセンターの増加

1990年代といえば、1990年5月の大型店法運用緩和の通産省通達を契機とする郊外型大型商業施設の急増があり、それは仙台に限らない全国的趨勢であった。しかしこの時期の仙台の市街化の状況をふりかえると、全国の他都市と比べても特筆すべき都市拡大の契機があった。すなわち、1989年4月の政令指定都市移行があり、それを前にした1987年7月には地下鉄が開業した。そしてその南北両ターミナルの泉中央と長町南地区は新仙台の「副都心」と位置づけられて、田園地帯から新市街地へと急激に変貌した。さらに、両ターミナルを起点として、泉中央では1991年5月、将監トンネルが開通し、富谷町方面と直結して4号バイパス沿いに大型商業施設を含む新市街地が急展開する契機と

表6 仙台市・隣接市長町における大規模小売店の業種別推移（2006年3月現在）

	1970's	1980's	1990's	2000's
ショッピングセンター	1		3	4
スーパー	19	10	30	22
ホームセンター	1	5	12	11
ドラッグストア			5	4
家具・家電	3	2	11	7
衣類・スポーツ	1		12	5
その他専門店	2	4	9	
百貨店、複合商業施設	5	1	10	4

※宮城県への届出史料（1992）、および1992年6月以降は宮城県と仙台市の関連 web 公開リストによる。店舗面積1000㎡以上。

※業務分類は、県の分類を参考にした筆者の再分類による。
※1960年代は、既成市街地の老舗であり、省略。

なった。長町南方面でも1994年12月、名取川に太白大橋が建設されてそれまで隔てられていた西中田から名取市内陸方面へと大型商業施設を伴う新市街地が広がった。またこの間、八乙女と宮城 IC とを結ぶ北環状線沿線の商業集積も顕著であった。これらは、仙台における商業立地の郊外化を急進させた。

表6は、仙台市と隣接市町における大型小売店の立地件数を業種別にまとめたものであり、図10はその分布を示したものである。これらを見ると、仙台とその隣接市町において量販店やホームセンターが急増したのは1990年代であり、その分布は都心部の集積地以外は、旧市街地外側の郊外に立地する。

このように、90年代の仙台は、市街地の拡大が急進展した時期であって、それは規制緩和直後の大型店化と同時に進行した。この結果、90年代の仙台では、大規模なスーパーやホームセンターが激増したのは事実であったといえる。そしてそれらには花売り場が併設するケースが多いことも経験的には事実のように思われ、それが仙台市民の花へのアクセス機会を増やし、伝統的な花消費の意欲をさらに高めることにつながったとみることは、無理のない理解である^{*15}といえる。

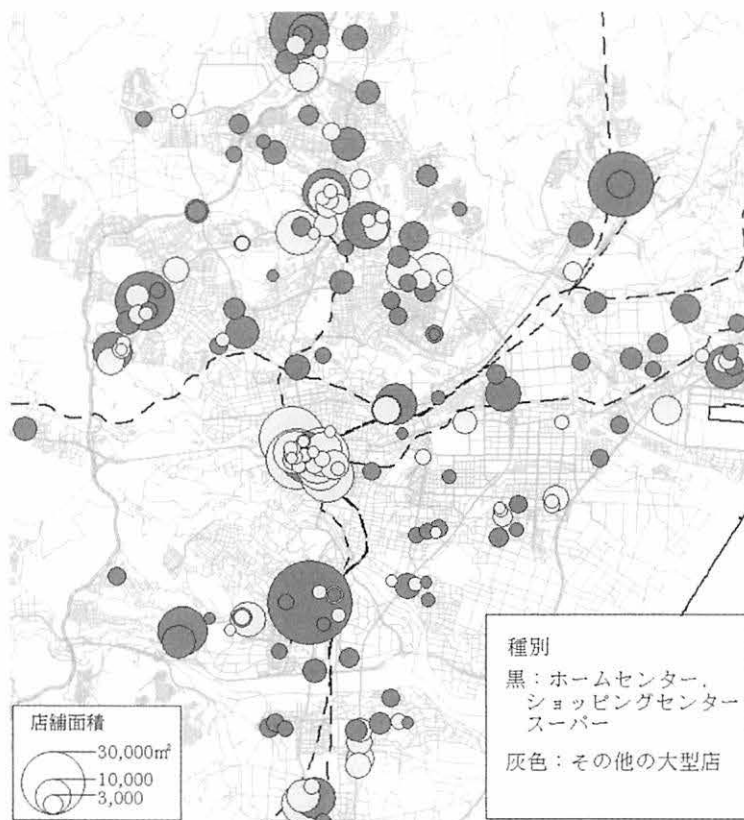


図10 仙台市と隣接市町における大型店の分布
(2006年3月現在)

Ⅶ. まとめと課題

1. まとめ

本研究では、1世帯あたり切り花支出額の全国最多都市の1つである仙台市の切り花消費について、データの直接の出所である「家計調査」の詳細な分析、花の流通業界関係者の見解の調査、その裏づけを検討するための仏教会および華道連盟へのヒアリングと関連統計の分析の結果について報告した。得られた知見は以下のよう

にまとめられる。
まず、家計調査から明らかになった切り花消費の地域性については以下のようにまとめられる：

① 切り花消費の地域性は、従来いわれていたような高所得で生活様式が都市化・洋風化した大都市で多いという状況が、高度経済成長期

の終焉とともに背景に退いて、鹿児島・仙台などの数都市が最上位を争うようになるという変化が明らかとなった。

② これらの切り花多消費都市は、少なくとも1970年頃には既に切り花消費が多かった「伝統的切り花多消費都市」であった。

③ その分布は一定の地方にまとまっているのではなく、全国各地に分散しており、したがってそれらの立地は、マクロな気候や風土的条件ではなく、県域以下のローカルな花消費の傾向を反映しているとみられる。

④ とりわけ仙台では、90年代において切り花支出額が急伸して、鹿児島と比肩するほどになるという変化があった。

次に、仙台の切り花消費の多さについての花流通関係者の証言では、墓前供花の量の多さが共通に指摘された。また、生け花が伝統的に盛

んであることも指摘された。

それらの信憑性を確認するための仏教会と華道連盟へのヒアリングにおいては、墓前供花の量の多さについては支持する証言が得られ、生け花については切り花消費に反映するほどではないとの見解を得た。

さらに、関連統計の分析では、以下の諸点を確認した：

① 商業統計の「花・植木小売業」事業所数・年間小売販売額ともに、仙台は大都市の中では多いといえることが確められた。

② 仙台中央卸売市場の切り花品目別取扱額の分析からは、80・90年代の市場急拡大期に、供花の定番であるキク類をはじめ従前からの品目比率が保たれながら量的に拡大したものであったことが明らかとなった。

③ 切り花品目構成の東京・秋田両市場との比較からは、仙台市場が東京よりも秋田市場と同じくキク類が突出した割合を持ち、その都市規模に比べて「伝統的」な性格が表れており、伝統的な墓前供花慣行を反映したものである可能性がある。

④ 同じく、取扱額の月変化をみると、仏花の代表であるキク類のピークが最も顕著なのは仙台市場であり、供花量の多い墓参慣行の存在を裏付けている。

⑤ 切り花単価の比較では、仙台市場は全国最高水準にあり、それは旺盛な購買活動とその結果としての切り花支出額の多さを説明し得る状況証拠の1つである。

最後に、90年代における切り花支出の急増の背景として、伝統的に活発だった花卉流通業界の動きを背景とした花卉市場の統合移転、そして折から急激に進行した仙台の郊外化とそれに伴う大型量販店やホームセンターの立地、そのことによる仙台市民の花へのアクセス機会の増加が確かにあったことを示した。

以上を総合すると、仙台における切り花支出の多さの背景には、基本的には花卉流通関係者と仏教会の証言あったような墓前供花量が多いという地域の伝統的な慣行が確かにあるらしいといえる。それは、扱われる切り花品目もっ

と多様化してもよいはずの仙台市場の急拡大期にもキク類の割合が保持されてきたこと、また都市規模からみてもっと多様な品目構成になってもよいはずなのにキク類の割合が依然突出していること、さらには、3・8月の墓参月のキク類のピークが顕著であるという点に表れている。こうした伝統を背景としつつ、とりわけ90年代に、仙台の花消費を急拡大させた背景には、花卉市場の統合と急激な仙台の郊外化があった、というふうにまとめることができる。

2. 課題

残された課題は多い。卸売市場統計による比較は、今回は3市場だけであったが、より対象都市を広げた経年的な比較分析を行ってみると、「大都市型」「伝統型」といった地域特性をさらに包括的に検討できるだろう。しかし他方で、統計の分析から見出された諸傾向は、興味深くはあるとしても、あくまで状況証拠にとどまる。切り花支出額の多い都市では、どこでも事実として墓前供花が多いのかどうかについては、墓参の時期をとらえて直接観察によって都市間・地域間の比較をしてみることで確認できようが^{*16}、これには広範な協力による調査が必要である。また、花市場の統合と郊外化の進展についても、90年代の切り花支出増加とは相関関係を明らかにしたけれども因果関係は類推にとどまる。

さらに、花卉業界関係者の証言の中で興味をひかれながらも、多忙にかまけて未だ調査の機会を作れていない点として、「削り花」の減少という問題がある。これは、その作り手であった近郊農村の農家における技能者の高齢化と技能の継承問題があると想定されて興味深い問題である。

いずれにしても、これらの残された点について、本報告が読者の関心を引き起こすことにつながれば幸いである。

謝辞

本研究の過程で情報提供をいただいた下記の方々に記して謝意を表します：旬桂島園芸社長、仙台中央卸売市場花卉仲卸協同組合・畠山司事務局長、宮城県花卉商業協同組合・木川信一企画室長、仙台生花株式会社遠藤常務、高橋生花舗・高橋正樹さん、宮城県仏教会・福寿院住職、宮城県華道連盟・朴澤一草事務局長（心月寺住職）。

一連のヒアリングの多くは、2006年度後期の実習授業「地域構想学発展実習」において、筆者のコースを選択した12名の2年次生とともにいった。筆者が掲げた問題に関心を抱いて選択してくれた学生諸君に謝意を表します。

<注>

- ★1) 2人以上の非農林漁家世帯。
- ★2) 東北学院大学図書館 home page で提供されている検索サイトを駆使したが、仙台の花消費の地域性に関するタイトルは見出せなかった。仙台市民俗資料館でも供花慣行に関する知見がないかどうか学芸員に訪問ヒアリングしたが、情報は得られなかった。なお、河北新報2007年9月26日に、筆者も取材を受けた仙台の切り花消費に関する記事が掲載されたが、これは本稿がほぼ完成していた時期であった。
- ★3) 抽出世帯数は、仙台市の人口増加とともに80世帯から100世帯程度へと増やされてきた。
- ★4) 2005年版による。
- ★5) 最新の2007年版では、1位が福島市（17,789円）、以下仙台市（15,407円）、鹿児島市（15,239円）、鳥取市（14,769円）、京都市（13,563円）であった。
- ★6) 下位から上位に変化したのは、関東の千葉市と中部の富山市ぐらいである。
- ★7) 『仙台市中央卸売市場30周年記念誌』（1991、p.226）に以下の記述がある：「城下町の造営とともに北山や元寺小路に寺町がつくられ、仏花や墓参の花などを供給するために寺町に花屋が集まった。これらの花屋は、みずから畑をもち、花を自作し、あるいは山野から花を集め、客を待つと同時に大八車を曳いて売り歩いた。」往時から花屋の小売活動が活発であったことがしのばれる。
- ★8) 鹿児島市の花消費と墓前供花の慣行については、栗林（2003）に次の記述がある：「友人の鹿児島県人や鹿児島勤務経験者に聞いてみると異口同音に『そ

れはお墓の供花だよ。春秋の彼岸、お盆だけでなく、頻繁にお墓参りをして一年中お墓の花を絶やすことのないよう努めている』とのこと。鹿児島の人にとっては祖先を敬う気持ちが極めて強いこともあるが、何よりも立ち並ぶお墓の中で、わが家のお墓の花だけが枯れているようなことは、最大の恥であるとのことで、なるほど納得した次第である。」この文献は2ページのエッセイで、注2）で記した On Line 検索では検出できず、附属図書館の書庫で別の文献を探索中に偶然見出したものである。

- ★9) 宮城県仏教会の事務局を務める「福聚院」（仙台市鹿野）の住職さんによる。
- ★10) 全827市でみると、人口当たりの花・植木小売事業所数では石巻14位、塩釜8位と最上位にあり、同販売額でもそれぞれ33位と87位である。他の三陸沿岸都市（気仙沼、陸前高田、大船渡、釜石、宮古、久慈）は、人口あたり事業所数は100～500位、同販売額では300～600位台で、それほど多いとはいえない。小売店数の多さは大型店化の遅れをも示唆することも念頭におかねばならない。
- ★11) 市場で扱われる花のすべてが仙台市内の消費に振り向けられるわけではないので、市場の取引内容がそのまま仙台市の切り花消費の様相を正確に物語ることにはならないが、他方、商業総計（2002）による花・植木年間小売販売額92億円（表4）と、仙台中央卸売市場の総計（2004）による切り花取扱額98億円は同規模であることから、市場取扱量のかなりの部分が、市場地域内で圧倒的に大きな需要を持つ仙台市内に振り向けられていると考えてよいであろう。
- ★12) 東京都開設の中央卸売市場の合計。
- ★13) 「キク類」を輪ギク、スプレーキク、コギクに分けてみると、仙台市場（2005）のデータで、ピークの3月に対する最少月10月の取扱額の比は、輪ギク3.3倍、スプレーキク2.5倍、コギク9.9倍、キク類全体で3.5倍。また、3月の取扱額が年間に占める割合は、輪ギク14.7%、スプレーキク13.6%、コギク24.4%、キク類全体15.6%である。10月が端境期となるコギクの倍率が高く算出され、また用途が多様化しているとされる（辻、2001）スプレーキクのピーク倍率がやや低い。しかし、3月・8月に顕著なピークを形成する点ではキク以外の品目とは明らかに異なっており、同じキク類として基本的な違いはないといえる。
- ★14) 『仙台市中央卸売市場30周年記念誌』に、注7）の引用部分に続けて以下の記載がある：「大正時代、

生花が一般的になるとともに、花の需要も増大。花材の葉蘭、椿、あせびなどを県外から入荷する業者がでてくる一方で、岩切、鶴ヶ谷、原町など仙台市内の北方での生産がふえ、花の取引が増加。大正4年、市内の業者が集まり、仙台生花商組合を結成。毎月例会を開き、その月の生花材料の価格を決めるようになった。これが、仙台における花いちばの始まりである。(中略)戦後は駐留軍夫人のパーティーやクリスマスなどの消費スタイルも加わって花卉の消費がふえる中で、昭和20年代半ばまでに仙台中央生花市場、仙台海市場、東北園芸市場が誕生。30年代の高度成長、所得倍増でいちば取引も活発になり、移転・改組を重ねて、40年代には宮城野生花、東北園芸が加わって、(中略)5つの問屋体制になった。そして花卉部開設前後。競争が激しくなるとともに、秩序ある花卉の流通、花いちば経営の合理化、近代化が望まれるようになったのである。

★15) 泉市野村で花卉の生産直売を営む桂島園芸店におけるヒアリング(2006年6月)の際も、「15年前」から近隣にホームセンターが急増して売り上げが減少したため、それらとは競合しない高品質の鉢花を直売する現在の業態に転換したとの証言を得た。

★16) 2007年の春彼岸の際(3月21日)、仙台と山形の寺町の墓地を試みに観察して回った。サンプルが僅少のため(仙台:禪系2、浄土系1、山形:浄土系2、禪系1)もちろん一般的にはいえないが、仙台での供花の量は、宗派にかかわらず、確かに一見して多いと分かるものであったことを付記しておきたい。

<文献>

- 梶山陽子(1975)「わが国における花卉園芸の特色——需要面より」東北地理、27-2、82~89
- 太田理子(1978)「花き」、長岡・中藤・山口編『日本農業の地域構造』大明堂、180~192
- 安東誠一(1984)『発展なき成長』東洋経済
- 仙台市中央卸売市場記念誌編集委員会(1991)『仙台の発展とともに——仙台市中央卸売市場30周年記念誌』仙台市中央卸売市場
- 矢口芳生(1992)『フラワービジネス』農林統計協会
- 長岡 求(1998)『変革期の花き流通』家の光協会
- 辻 和良(2000)「切り花の消費動向と消費者の購買行動」和歌山県農林水産総合技術センター研究報告、1、1~12
- 辻 和良(2001)『切り花流通再編と産地の展開』筑波書房
- 両角政彦(2002)「日本における花きの生産と流通の地域変動」地理誌叢、43-1・2、5571
- 栗林直幸(2003)「日本の花の消費と文化あれこれ」農林金融、2003-6、30~31

以下の誤記がありました。おわびして訂正します。

- ・ 13頁 表1タイトル 「5年次平均」 --> 「6年次平均」
- ・ 18頁 右段下から5行目 「第二に」 --> トルツメ
- ・ 21頁 右段 「（辻,1997?）」 --> 「（辻,2000）」
- ・ 25頁 表6タイトル 「隣接市長町」 --> 「隣接市町」